

# 熊野川を語る会

## 議事録

平成 17 年 11 月 26 日 (土) 14:00 ~ 16:30

紀宝町保健センター 会議室

## 庶務(中條)

時間となりましたので、熊野川を語る会を開催させていただきます。

最初に、今日、ご出席の皆様の紹介をさせていただきます。

まず、話題提供者ということで、紀宝町、鵜殿村、熊野市から 4 名の方にご出席をいただいております。

谷上嘉一様、紀宝町からお越しいただいております。荘司健様、紀宝町からお越しいただいております。高橋徹夫様、鵜殿村からお越しいただいております。花尻薫様、熊野市からお越しいただいております。

熊野川懇談会の委員の方は、本日 7 名の方に出席いただいております。熊野川を語る会は、熊野川流域内の 6 ヶ所で開くんですけれども、今回の語る会は、清岡委員、瀧野委員、間瀬委員の 3 名の方に担当していただいております。また懇談会委員で、本日都合がつかしました江頭委員長、椎葉委員、中島委員、吉野委員に同席いただいております。

また、河川管理者として、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の橋本副所長に同席いただいております。最後に、私ども庶務ですけれども、三井共同建設コンサルタントの中條が庶務を努めさせていただきます。よろしく願いいたします。

では資料の確認に移らせていただきます。お手元の資料の確認ですけれども、一つづりで、熊野川を語る会議事次第ということで、ホッチキスどめの分 1 部となっております。ご確認ください。

議事の紹介ですけれども、きょうの議事としては、お手元の資料に示すとおり、まず開会、2 番目に熊野川を語る会の趣旨について、3 番目に話題提供者の自己紹介、意見交換、その他、閉会ということで考えております。会議が長くなりますので、途中 10 分程度の休憩を挟ませていただいて、終了時間は 16 時 30 分を予定しておりますので、よろしく願いいたします。

それと、この会議を進めるに当たっての注意事項を説明させていただきます。

まず、発言に当たっては、進行役の指名を受けてからご発言をいただくようお願いいたします。また、傍聴者の方につきましても、同じように進行役の指名により発言することができます。意見のある方は、挙手をしていただいて、進行役の指名を受けて、お名前をおっしゃってから、発言をお願いいたします。

あと、この語る会でお聞きした意見については、今後の懇談会の審議で活用させていただきますので、意見交換や発言の中で出た質問等に対しては、この場では原則回答は

差し控えさせていただきます。

最後に、今回の発言内容につきましては、議事録としてまとめて、懇談会の資料として公表いたしますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議事に入りたいと思います。清岡委員、よろしくお願いいたします。

### **清岡委員**

本日は、熊野川を語る会にお集まりいただき、まことにありがとうございます。本日の司会進行は、私清岡と、ここにおります瀧野、間瀬の両委員が務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

まず初めに、庶務の方から、新しい河川制度の視点について、及び熊野川懇談会の趣旨について、説明していただきたいと思います。庶務の方、よろしくお願いいたします。

### **庶務(中條)**

資料の中にもありますけれども、前の画面のパワーポイントで説明させていただきます。

新しい河川整備についてということで、平成 9 年に河川法が改正されまして、これまでの治水、利水に加えて、河川環境の整備と保全が加わり、これに伴って、河川整備計画を策定するという流れになっております。イメージ的には、パワーポイントに示すように、明治 29 年に、河川法、近年の河川制度が誕生して、そのときには治水だけだったんですけれども、昭和 39 年に、治水と利水ということで、制度の導入が図られました。そして平成 9 年に、環境意識の高まりとともに再度河川法の改正が行われ、治水、利水、環境の 3 つのバランスを考えた整備を行っていくという法律の流れになっております。

次に、熊野川懇談会においては、2、30 年を目標に河川整備計画を策定するわけなんですけれども、その簡単な流れを示しております。

まず、熊野川を管理する近畿地方整備局の方と、熊野川の今の姿や悩み、熊野川らしいあるべき姿といった情報の共有化を行い、懇談会の審議を重ねてまいります。懇談会の中では、現況の把握を行い、課題を整理し、河川整備のあり方等を会議の中で審議をしまして、それを意見として近畿地方整備局に提出するという形になります。

その中で、今回、語る会ということで、地元住民の持っている情報を共有化するために、懇談会、河川管理者、地域住民と共同体、そういうところと一緒に話し合う場として「語る会」を開催させていただいております。

熊野川懇談会というのは、どういうものかというのをちょっと説明させていただきます

す。設立主旨としては、先ほど言ったように、今後二、三十年の具体的な河川の整備内容を示す河川整備計画の案を策定するために開かれておりまして、  
、  
と書いてありますけれども、  
河川整備計画の原案について意見を述べる、  
関係住民意見の聞き方について意見を述べるということを目的に設立されました。

懇談会の名称については、淀川とか他の一級河川等では、一般的に流域委員会という名前をつけていますけれども、熊野川に関しては、今後の姿、悩みを考えるに当たって親しみやすい名前ということで、流域委員会の名称を懇談会と名づけております。

審議の対象としては、主に国土交通大臣の直轄している区間 - - 直轄管理区間という名前ですけれども - - を対象に審議をしていくこととなります。直轄管理区間というのは、国が直接管理している区間のことで、熊野川に関して言えば、熊野川の下流域の熊野川河口から約 5 キロの区間、相野谷川、市田川、それと熊野川の上流域の猿谷ダムの上下流区間および取水堰のある野迫川村の池津川の取水堰堤、川原樋川の取水堰堤、そういうところが直轄区間として今回の計画の対象区域となります。

以上、熊野川懇談会の設立目的と整備計画の対象範囲を説明させていただきました。

以上です。

#### **清岡委員**

次に、熊野川を語る会の主旨説明及び意見発表に移りたいと思います。進行役を瀧野委員にお願いいたしますので、よろしくお願いいたします。

#### **瀧野委員**

進行役を務めさせていただきます瀧野と申します。よろしくお願いたします。

それでは、熊野川を語る会の趣旨について説明させていただきます。

熊野川懇談会は、河川整備計画案に対して、学術や地域の専門分野から意見を述べるとともに、地域の皆さんの意見をいかに反映させるかを検討するために、平成 15 年 10 月に組織され、現在までに 3 回にわたって審議をし、現地視察会等も重ねてきました。このたび、当懇談会の活動の一環といたしまして、熊野川に対する地元の方々のご意見やお持ちの情報を伺い、それらを川づくりのために役立てていきたいとの思いから、熊野川流域の 6 ヶ所で熊野川を語る会を開催することになりました。今回はその 2 回目でございます。10 月末に十津川村で第 1 回を開催し、あす、下北山村で開催する予定となっております。

つきましては、その趣旨をご理解いただきまして、ご協力くださいますよう、よろし

くお願いします。

なお、熊野川を語る会では、ざっくばらんに皆様のお話をお聞きしたいと考えています。特に、この地域は、熊野川だけでなく、七里御浜という砂利浜にも面しています。熊野灘を通して熊野川とつながっているという認識をしております。七里御浜を含めた熊野川の歴史や文化、暮らし、川や浜とのかかわりなど、皆様お持ちの情報をご提供いただきたいと思います。また、今後の熊野川の自然、暮らしのあり方などについて、ご意見やお考えがあれば、遠慮なくおっしゃっていただければありがたく存じますので、よろしくお願いします。

それでは、意見発表に移りたいと思います。きょうご出席の 4 名の方に、自己紹介、意見発表を含めて、よろしくお願ひしたいと思ひます。

まず、谷上嘉一様からお願いします。

#### **話題提供者（谷上氏）**

皆さんこんにちは。ただいまご紹介をいただきました谷上嘉一でございます。大変失礼ですけれども、この後座らせていただきたいと思ひます。と申しますのは、しゃべることがわからないものですから、カンニングペーパーをちょっと見たいなど、そういう事情がございますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

まず、私の住んでいるところですが、ご存じの方もたくさんおられると思ひますが、東海最南端と言われる土地です。紀宝町北檜杖といひます。私の家は、川のほとりです。熊野川全体で言ひますと、下流部分になります。

私自身、地域でどんなことをしているんだらうかということですが、まず北檜杖地区の区長をおあずかりしております。その他、紀宝スポーツクラブの会長も承っております。そのほか、町内外のもろもろの組織のお手伝ひを 10 件ほどさせていたひているという状況です。

私、幼少のころから熊野川にずっとかかわり続けてまいりました。特に、現在の県道紀宝小船線と言ひられていますものができるまでは、熊野川を生活の手段としてその恩恵を受けてまいりました。その分ほかの皆さんとはこの地への愛着、こだわりというものが少し違ひうのかなと、そんなふうに分自身思ひております。

私、40 年ほど鷓殿村でサラリーマン生活を続けておりましたけれども、30 年ぐらい前から、川船にも大変興味がありまして、その段階では趣味でしたけれども、川船をつくり続けております。今ではもうサラリーマンではなくて、船大工と呼ばれるようになり

ました。年齢は 63 歳です。

趣味は、スポーツ、特に野球が忘れられなくて、寿野球、いわゆるお年寄りの野球ですね。老骨にむち打って、現在も頑張っております。あと、川のそばですから、魚とり、アユとかウナギ、あるいはズガニとか、そういうものも趣味の 1 つです。

前置きはそのぐらいにさせていただいて、今後の施策の参考になればということで、2 点ほど私、意見を述べさせていただきたいと思います。

まず 1 点目は、自然との共生ということについて、ちょっとお話をさせていただきたいと存じます。

最近、どこへ行っても、自然との共生という言葉が口にする方が大変多くなったように思います。これは確かに大切なことだろうと思います。私自身も、最近、テレビとか新聞とかラジオでよく取材されるんですけども、自然との共生ということをよく口にする一人なんです。けれども、ここで一番問題なのは、自然との共生に誤りがあったらいけないということではないかと思います。要するに、私の言いたいのは、人間の勝手きままや利益を目的に、いわゆる営利目的ですよね、自然の摂理を無視していないかということです。

人間の住むところ、人間の憩うところ、それから野生動物の生息するところ、樹木の育つところ、米や野菜のできる場所、あるいは水生植物、魚の生息する場所、それぞれのエリアがあると思うんです。そのエリアの中に人間がみだりに侵入をしてしまうと、やがては災害となり自然破壊につながっていく。そういったところが随所に見られます。そういったところをこれからは是正をしていかなければいけないのかなと、そんなふうに考えているところでございます。一度破壊してしまうと、人の力ではなかなかもとには戻せないだろうということです。このことを今後の施策にぜひ生かしていただきたい。

そういう願いで、自然との共生というお話はこれで終わらせていただきまして、あと、熊野川の現状ということで、数十年前の熊野川と現在の熊野川との比較の中で、どう変わったのか、私なりに気づいたところをお話ししたいと思います。

まず 1 点には、水質汚濁ということです。これは全く比較の対象ではなく、説明をする必要はないだろうと思います。

それから、熊野川の日常水位の変動。平均的に見て、昼夜の水位の差が約 50 センチぐらいあるのかなと。いわゆるダムの放水路というか、そういう状況にあります。これは、

当然のことながら、魚の生息、水生植物、これらの生態系への影響も非常に大きい。特にアユなんかは、本当に浅いところで産卵をしますので、産卵、孵化への影響もかなり大きいだろうと思います。

あと、川原がやせてしまっているということと、伏流水が非常に減っているということで、これがまた汚濁につながっていく。そういう現状にあらうかと思います。要するに、浄化能力が非常に低下しているということです。これは、当然のことながら、上流からの砂利の無供給といいますか、供給されなくなったということで、あとは流出してしまうだけと。それに追い打ちをかけたのが、田中角栄の列島改造論とか、高度成長に伴って行われた、ダムから下流域での無計画な - - 無計画だったかどうかは知りませんが、私自身は、無計画だったなというふうに感じておりますが - - 砂利採取であったと思います。1,000 万トンなのか、2,000 万トンなのか、採取量はちょっとわかりませんが、この影響は非常に大きいということで、こういったことが熊野川の汚濁に追い打ちをかけているのかなと、そんなふうに考えております。

また、井田海岸から七里御浜へかけての浜辺は、複合的ではあるでしょうけれども、砂利が流域に減ったということも一因になっているのかなと、そんなふうに感じております。

それから、魚が非常に減少しております。種類のには余り変わらないんですけども、量的には比較にならないほどです。水質が汚濁して、水生植物が少なくなれば、魚の数が減るとするのは当然の成り行きだろうと思います。

魚の件ですけれども、最近外来魚が増えてきていまして、従来魚にとってはダブルパンチのような状況にあります。それと、これも当然の成り行きなんですけれども、特に下流域で、海水が川に向かってどんどん進入してきているということで、従来は見られなかった海の魚がたくさん入り込んできている。あと、巻き貝のような、水質が悪くなると生息すると言われていた貝なんか、下流から上流へ向かってどんどん上ってきております。

これは、川と直接的ではありませんけれども、周辺を見ますと、広葉樹が減少している。これは保水力の低下につながります。

あと、生活環境とかの変化によって、昔は田舎ではどこでもありました山田と言われる山にある田んぼがなくなってしまった。これもやっぱり川の汚染につながるのかなと思います。

あと、目につくのが、道路建設の不備といいますか、道路ができて、交通の便は大変よくなるわけですが、川の状況まで配慮はなされていなかったということです。崩した山は、崩しっ放しの状態で、川の方は大変被害を受けているということです。例えば、四村川、あのあたりは特にひどいです。川でなくなってしまったような状況にあります。

それと、景観の悪化です。これも道路工事と関連する訳ですが、例えば、擁壁とかが景観を大変損ねている状況にあります。熊野川も、和歌山県側、168号線の新宮から出たあたりは、どんどん整備を進めて大変便利になっているんですけども、担当の部署が違つと、同じ国、県であっても、あれは大変景観が悪いと、それをわかっていながら、どんどん工事は進んでいると。あれはとても見苦しいから、あの前に木でも植えて何とかしようじゃないかという論議も今されております。私が、笑い話の中で、熊野川の世界遺産にちなんだ絵でもかいてやったらどうですかというようなことをこの間お話ししたんですけども、あの擁壁、どう見ても、景観が悪い。川から見ると、大変な状況にあるなど、そんなふうに考えます。

そのほか、昔と比べると、ごみの投棄も非常に多いです。熊野川をきれいにしようという機運の高まりとともに、いろんな方がボランティアで、一生懸命ごみ拾いとかが、ごみの投棄を防止しようという運動をやってくれているわけですが、生活形態の移り変わりといいますか、特に発泡スチロールであるとか、ブルーシートであるとか、そういったものが非常に多いということと、あと、生活排水なんかも大変増加をしております。

今申し上げたあたりが、非常に変わったという部分なんですけれども、悪い点ばかりを申し上げたようですが、もちろん、悪い点ばかりではございません。交通の便が非常によくなったとか、いい部分もたくさんございます。

もう1つ、私自身、大変喜ばしいことだと思うのは、森を育てよう、自然を守っていこうという機運が非常に高まってきて、いろんな団体、いろんな組織がこういう運動に取り組んでおられる。そういうことは大変ありがたいなと感じますし、ぜひ必要なことだと思っております。私自身も、そういうところへ少しでも寄与できたらいいなと、そんなふうにも考えるところでございます。

以上が、私の感じたままの熊野川の周辺の現状です。もし参考になることがありましたら、今後の施策の参考にしていただければありがたいということを申し述べまして、

私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

### 瀧野委員

どうもありがとうございました。続きまして、荘司健様からお願いします。荘司さんのご意見の後、きょう急遽欠席されました小門廣義さんのご意見もあわせてお願いしたいと思います。

### 話題提供者(荘司氏)

紀宝町北檜杖の荘司と申します。熊野川の河口から約 6 キロのところに代々住まいしております。私自身も、4 年間の大学生活以外は、朝夕その場で生活しております。

今まで、熊野川で死にかけたこと 1 回、亡くなられた方を引き上げたこと 3 回、ほかの人と共同しながら流された人を助けたこと 2 回、それから、平成 2 年の 19 号台風のときに、川船を改装して水没した家から渡した方 32 名、そういう熊野川とのかかわり方で、ここまで来ております。

ことし、熊野川へお客さんをご案内しまして、お客さんからいただいた言葉は、きれいな川水ですね、エメラルドグリーンですね、こんなきれいな川見たことない、あの茶色いところは濁っているんですか - - これは本当は透明で、底が見えているんですが、そのような評価をいただきました。しかし、私たちの目から見ますと、川の水の中には微粒子がたくさんありまして、透明度がなくて、昔と比べものにならないほど汚れています。

例えば、熊野川の各支流の水の清澄さ、皆さんご存じかと思いますが、これが一たんダムに入りますと、小森ダムの下流もそうですし、二津野ダムの下流、棕呂の発電所の下流もそうですけれども、あのように濁ってしまいます。このことにつきまして、電源開発の方では、十分認識して努力をしていただきたい、このように思います。

一方、先ほど谷上さんの方からも魚が大変減ったというお話がありましたが、水中の養分といえますか、いろんな生物を育てる養分につきましては、やっぱり森林、林業の問題が多くあると思います。過去、京都の三十三間堂の棟木の伝説にあるように、この熊野川流域は、日本各地へ木材を供給してきました。この間過伐になったこともあります。特に戦中、戦後の伐採によりまして、山林は大変荒れました。その後、スギ、ヒノキが中心に植えられて、ここまで来たわけですが、ここへ来て、木材の大幅な値下がりによりまして、必要最小限の保育であります間伐さえもおざなりになっております。

林内で間伐木を横倒しにして地面につけますと、そこに多くの腐葉土が堆積します。

たくさんの段差ができます。この段差からは微生物によりまして下にたくさんの穴があきまして、雨の水は腐葉土に吸収され、その穴から地中に導かれます。林家も、そういう育林方法、間伐をすればいいということはよくわかっています。しかし、今その余力がないのが実情です。熊野川の豊かな清流を取り戻すために、幅広い方々の取り組みとご支援をお願いしたいと思います。

次に、河川の整備についてでございます。私は、昭和 28 年の洪水、この年は有田川の方では大変大きな災害が発生しましたが、それから伊勢湾台風、この 2 回、自宅の床上浸水を経験しました。一波ごとに水が上がってきます。抵抗できない無力感、あきらめ、悔しさ、経験しないとわからないことと思います。そのとき、私はまだ子供でしたので、父は、家の中に川舟を引き入れまして、もしものときはすぐ避難できる状態で夜を明かしました。

かつて明治 22 年の十津川大水害で、この流域は大変大きな被害を受けました。河岸の段丘や耕地がたくさん流出しました。私の住む地区では、住民が土地を提供し、護岸の堤防を築きました。今も川岸の川原の中に埋まっています。築堤当時、この堤防上から釣りができたと聞いています。熊野川の河床はそれほど低かったんです。その後、表土が流出し、また昭和 20 年ごろからは、工事の土砂がすべて河川に捨てられるということで、河床は上昇を続けました。そんなに昔の話ではありません。私は、伊勢湾台風当時、私の地区では河床が最も高かったと認識しております。

その後、砂利採取、砂防ダムの整備、また工法の変化もありまして、流下するバラスは大変減少しました。現在、河床といえますか、平水位の水面の高さは、私の家の下では約 1 メーター 50 下がっております。このことで、平成 2 年、それから平成 7 年ですか、2 回の水害のときにも、家まで水が来なかった。河床が下がったことは大変喜んでおります。

ちょっと場所は変わりますが、熊野川の河口右岸に阿須賀神社というのがあります。アスカとはサメとも呼ばれまして、河口の砂洲のことです。この砂洲は、たびたび熊野川に入る航路を妨害しました。アスカを切る、サメを切るというのは、航路整備のことで、砂洲との戦いは長く続いてきたと言われております。現在、環境ということが大変重視されまして、砂洲の砂利採取というのはタブー視されております。しかし私は、この堆砂を処理することで、洪水時の流れをよくし水害を防ぐことができるのであれば、このことも再度検討する余地があるのではないかと、このように考えております。

3点目は、暮らしの問題です。流域の過疎、高齢化は大変進んでおりますけれども、昔私が子供のころに流れてくるごみというのは、ゴム草履とか、瓶とか、野球ボールとか、そういうものでした。その当時、ごみというのは、家の横で焼くか、畑の横に置いておけば、自然に消えていったものだったわけです。しかし、現在、流れてくるごみというのは、一番目立つのがブルーシートです。これは大変大きい状態で流れてきて、川岸の木々にひっかかります。それから、発泡スチロール、これもたくさん流れてきます。それから、ビニール等、際限なく流れてきます。

かつて紀宝町は、ウミガメ保護条例というのを日本で最初に設けました。このときのキャンペーン看板が、ウミガメの無念という看板でした。ビニールを食べ、空腹感がなく、カメが餓死するというキャンペーンでした。現在は行政の方でごみ収集が行われておりますけれども、地域の住民の方々、それから工事関係者の方、台風が来ると風が吹いて飛んでしまうという面もあるかも知れませんが、もう一度こういうごみを流さないという働きかけが必要ではないかと思えます。

もう1つ、世界遺産登録で外部からお客さんが大勢来ておられます。そして、車から捨てられるごみというのも大変多くなっています。そういう方に対して、もう一度しっかりと働きかける必要があるのではないかと、このように考えております。

以上、つたない話ですけれども、私の提案とさせていただきます。どうもありがとうございました。

#### **瀧野委員**

ありがとうございました。

小門さんについては、庶務の方から発表させていただきます。よろしく申し上げます。

#### **庶務(中條)**

きょう欠席となってしまったんですけれども、小門さんから熊野川への思いということで文章をいただいておりますので、代読させていただきます。

カラスが鳴かない日があっても、川を見ない日はないほど、川を愛し、60年余り、熊野川とともに生活して、育った年月は、楽しい思い出が多く、川なしに自分の人生はないほどです。夏は、テナガエビ、石積みウナギとり、ウロリすくい、秋口にかけては、澄み切った川底にアイカケのへし突き、ズガニとりに楽しみ、新宮、石淵(やぶち)の池田の渡し船では、5、6メートルでも白石が見えた思い出が懐かしく、涙の出るほどです。

日本の経済成長に伴い、エネルギーを求めて、電源開発公社によるダム群が建設されたのですが、その中でも風屋ダムは大型なので、大雨による濁水が長期にわたって貯水され、改良されず、一時表面取水に工事もされましたが、効果が小さいことは関係者の知るところだと思えます。発電オンリーでなく、ダム操作を上手に行ってもらいたい。ダムの寿命は 70 年から 80 年程度だと聞いていますが、近い将来電源事業も変わってくるかと思えます。そのときは、風屋、二津野、2 つのダムはもとに戻してくださるよう、英知を出してほしい。これができれば、熊野川は 70% 近く将来復元できると思えます。以上です。

#### **瀧野委員**

ありがとうございました。それでは、引き続きまして、高橋徹夫様、お願いします。

#### **話題提供者(高橋氏)**

皆さんこんにちは。鵜殿村に住んでおります高橋徹夫でございます。よろしくお願いたします。

私は、今現在鵜殿村に住んでおりますが、熊野川とのかかわりといいますと、私、鵜殿村ですと製紙会社に勤めておりました。製紙会社は水が命でございます、水なくしては紙ができないという、水は非常に大切なところであります。その水の供給源は熊野川でありまして、仕事をしている当時から、熊野川との関係が非常に大きくありました。

定年になりまして、その前からアウトドア的なことに興味がありまして、熊野古道も、その当時興味を持ちまして、いろいろ勉強させていただいて、隣におられます花尻先生の熊野古道語り部友の会に入らせていただいて、現在いろいろ勉強しております。まだ見習いの最中なんです、このすばらしい古道が世界遺産になりました。これを後世まで残していかなあかん、伝えていかなあかんなど、そのための一つの寄与をさせていただけないかという思いで今やらせてもらっております。

熊野川ですが、これは川の古道と言われまして、峠道の陸の熊野古道と一味違った趣を持った世界遺産であります。そういうことで、三重県では、東紀州地域交流空間創造事業ということで、世界遺産の熊野古道を活用した交流空間づくり、まちづくりを行って、地域の活性化を図っていこうという事業がなされております。東紀州地域といいますが、紀伊長島から南の紀宝町、鵜殿、熊野川沿いまでを言っておりますが、そこで現在 6 つの部会でそれぞれ事業が進められております。私たち紀宝町、鵜殿村地域では、

熊野川部会という名前で、世界遺産であり、川の古道であるこのすばらしい熊野川を活用した交流空間づくり、まちづくりをやっていこうということで取り組んでおります。

私は、先ほども申しましたように、語り部でちょっと勉強させてもらっているということもありまして、熊野川部会の地域住民代表の一人として参加させていただいておりまして、部会のまとめ役を仰せつかっております。

そういうことで、きょうは、私どもが取り組んでおります世界遺産熊野川を活用した地域活性化のための今の取り組みについて、若干説明させていただいて、問題点といたしますか、要望といたしますか、そのあたりのまとめをさせていただきたいと思っております。

私ども三重県側、紀宝町、鵜殿村周辺の地域に限ったことで言っておりますが、このあたりは非常に豊かな自然環境が残っておりますし、歴史的、あるいは文化的な資源もいろいろあります。そういうことで、熊野川の周辺における人々が集う交流空間づくりということを目指してやっておりますし、熊野川の世界遺産としての価値を保全しながら、周辺を含めた地域振興や観光振興をやっていけば、地域の活性化、地域の発展に寄与するんじゃないかと、そういうふうを考えてやらせていただいております。

いわゆる川の古道と言われる熊野川の川舟による川下り、こういうことを体感していただく。それから、川の横に古い道が残っております。そういう古道を歩くことで、熊野詣の信仰の奥深さを味わっていただくことができるんじゃないか。その辺、自然環境、自然景観と相まって、心の癒しを感じることができるんじゃないかと思っております。

それから、紀宝町に浅里地区というのがございます。ここは、飛雪ノ滝、あるいはキャンプ場がございまして、今申しました熊野川のよさを体感していただく一つの活動拠点ということで、アウトドアとか川で遊ぶとか、地産の食べ物を食べていただくとか、そういうことのできる一つの交流空間ということが言えると思っております。私ども熊野川部会では、川の古道、世界遺産熊野川の魅力を丸ごと体感できる交流空間というのをテーマにして活動を進めてきました。

その具体的な内容ですが、今までモニターツアーというのを2回やらせていただいております。ここへ来ていただけるお客さんに私たちがどういうもてなしができるのか、川及びその周辺の魅力をどういうふうに体感していただけるか、そういうことで、来ていただいたお客さんにいろいろ意見を伺って、これから進めようとしている事業の参考にしたいということで、モニターツアーを2回ほどやらせていただきました。最初は近

隣の方、2 回目は東京、大阪とかから来ていただいております。実際に川下りも体験していただき、古道も歩いていただき、地元の方との交流もしていただき、一様にここは素晴らしいと。それはある程度の賛辞はいただきますけれども、それだけではなくさらに後からいろんなメールをいただいたり、手紙をいただいたりしまして、熊野川というのは本当に素晴らしいところであった、地域の方々とのふれあいも非常によかったという真の意見をいただいております。熊野川が非常に価値のある川だと、あるいはその周辺が非常に素晴らしいところだと、通常の旅行では味わえないいろんな体感をしていただくことができるんじゃないか、できたんじゃないか、そして、そのように考える人々が、いろいろ工夫をして協力し合いこの流域の振興につなげていただいております。非常にありがたい、喜ばしいことだと思っております。お客さん方が川船に乗って川を下って、周辺の対岸を見まして、あそこに古い道が残っている、あそこを一遍歩いてみたい、あるいは浅里の集落を見て、滝を見て、あそこへもう一遍行ってみたいという思いをされたと思うんですね。そういうの方々を受け入れて、よさをもう一遍見ていただくと。そういうことで、我々は、単なる川船による川下り事業ということじゃなしに、いわゆるエコツーリズムという考え方ですね。その土地の資源の価値をよく見ていただいて、味わっていただいて、なおかつそれを保全していく、そういうルールを確立する。エコツーリズム、簡単な言い方ですが、そういうことを基本に置きまして、私たちは交流空間づくりを進めていこうとしております。

そうしていく場合、お願いしたいというか、これからやっていかなあかんことは、そういうエコツーリズムの目的を達成するためには、現在の自然、あるいは文化、あるいは景観、そういうことを壊すことなく、そのまま次代へ継承していく、こういうことが非常に大切なことじゃないかと思えます。

モニターツアーをやったときに、川辺へ出まして、テナガエビとりやウロリとりをやっていただいたんです。そういうことが常時やれるように、そういう水生生物等がすみ続ける、あるいは増えていく川づくりをやっていかなかったら、今言いました、私どもの趣旨とするエコツアーといいますか、いろんなお客さんにそれを目的で来ていただくことができなくなるというふうに考えられます。そういった面で、先ほど谷上さんや荘司さんが申されましたように、現状を維持し、なおかつもとへ戻す。これからの河川整備の中にそういう概念を入れていただきたいなと、そういうふうに思えます。

熊野川は世界遺産ですから、私どもはこれをきちっと守って、後世へ残していかなあ

かん、そういう責任があると思います。この熊野川を、利用といいますか、利水といいますか、あらゆる方が川に携わっておりますから、いろいろな方のそれぞれの思いがあるんですが、そういったことを基本的に守っていただいて、これからも残していくということをお願いしていきたいと思います。

例えば、護岸工事一つにしても、治水の関係上とかいろいろな制約があると思いますが、今申しましたように、景観を損なうとか、自然を損なうとかいうことのないような方法で、ぜひお願いしたいと思います。

それから、これから川を利用するということで、水上交通といいますか、水上の乗り物が増えてくるんじゃないかと思います。それらもある程度の規制、事故が起こってからは遅いです。問題が生じてからでは遅いと考えられますので、ある程度の水上交通の規制といいますか、これはまあいろんな問題があるとは思いますが、一概に言えませんが、その辺のこともある程度考慮していかなくちゃならないんじゃないかと思っております。

あと、ソフト面では、熊野川には文化や歴史がありますから、そういったことを継承する後継者ですね。若い方、子供さん等にこれから熊野川に関心を持っていただいて、地域に残っていただくといいますか、そういうことは川を保全していく上からも大事なことかなというふうに考えております。

いろいろな面からの制約があると思いますが、川を地域活性化の一つの手段という立場から意見を言わせていただきました。

えらい取りとめのないことでしたが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

#### **瀧野委員**

ありがとうございました。引き続きまして、花尻薫様よりお願いします。

#### **話題提供者(花尻氏)**

ただいまご紹介いただきました花尻でございます。

私は、もともと植物が好きでしたから、山野を駆けずり回りました。昭和7年生まれで、現在73歳になり、いつの間にかこんな年になったのかと思うんですが、その間三重県南部と和歌山県の東牟婁郡地域、奈良県は上北山村、三重県は北部御在所あたりまで、50年間調査に回りました。そのころは、いろんな動植物と出会い、元気でしたから、いつの間にかこんな年になったのかと、自分でびっくりしております。

それでは、これからかなり具体的な話をしたいと思います。

まず、熊野川についてですけれども、後でスライドを写してもらいますが、私は、現在三重県の絶滅危惧植物の専門委員をしておりまして、10 年前に三重県はこういうレッドデータブックをつくりましたが、10 年たって見直しの時期に来ました。現在、三重県南部で、植物だけで 40 種類の絶滅危惧種があり、その中で熊野川に関係のあるのが、ドロシモツケ、EN で、1B です。1 類、2 類という分類があるんですが、1 類というのは、これから 10 年間に絶滅の危機が予想される種類です。シモツケというのは、皆さんの家に植えてあると思いますが、瀨八丁のドロがついたのが、瀨八丁あたりから北山川の熊野市の神上町まで自生しております。

カワゼンゴというの、EN、1B 類です。環境省が 2000 年に調査した報告書 - - 私も加わりましたが、その中で、カワゼンゴは、熊野川に比丘尼転びという地名があるんですが、その辺から、北山川の熊野市神川町まで延びております。

ドロニガナというのは、今度和歌山県でシンポジウムがあり、村田源先生が見えますが、その方が昭和 26 年に瀨八丁で発見された、ニガナという種類の矮性です。すごい豪雨でも岩の割れ目に根を広げて流れないように頑丈にしがみついています。これが、瀨八丁を中心として、熊野市飛鳥町の大又川の源流まで広がっています。

キイトラッキョウというのは、ラッキョウの仲間ですが、これも貴重なものですから、1B 類です。この状態では、やはり 10 年後には絶滅の危機が高いと言われておりまして、環境省も 2 類に指定しております。

実物を映写してください。

これは、ドロシモツケです。家庭に植えてあるシモツケというのは、1 メートルから 1 メートル 2、30 と大きいですが、熊野川は洪水がありますから、すべてのものが洪水に耐えられるように矮性になる。背が低くて、流水にも耐えられるようになっております。これは割合に少なく、見分けが難しいですが、これも熊野市神川町の花知まで自生しています。

これは、カワゼンゴで、セリ、アシタバなんかの仲間です。これは割合に広く、比丘尼転びのあたりの川沿いの道にもあります。開花の期間が短いので、大変です。

これは、ドロニガナです。ごらんのように、岩の割れ目にしっかり根を張って、高さが 5、6 センチです。普通のニガナというのは、20 センチから 30 センチあるんですが、これは豪雨でも流れません。葉、花は流れても、根っこが残るから、次の年は再び芽吹

きます。

ほかにもありますが、これらは、全国で熊野川にだけしかない熊野川の固有種と叫びます。こういった植物は、先ほど谷上さんと荘司さんも言われましたように、ダムからの放流による汚濁によって傷んだりします。もう一つ、私は三重県の天然記念物調査員を 15 年間務めましたので、瀨八丁へ繋げく通いました。そこで気づいたのは、ウォータージェットの船が上れないので、ブルドーザーで川底を掘って、巨大な石を幾つも掘り出してあるんですね。そこまでしなくても通れるだろうと。川が濁水期で通れないのなら、最低限はやむを得ぬけれども、むだなことをして川底を掘るので、上流の淵で水位がぐっと下がるわけです。水位が下がると、先ほどの植物や水際に生きているものはみんな枯れます。何千年もかかって生き抜いた植物が、人間の利便性のために犠牲になるのはかなわぬとって抗議を申し込んだんですが、どうやら上の方で手を結んだみたいです。熊野交通へ直接話しをしてくれたようですが、熊野交通はあるところと手をつないで、まあいいじゃないかというふうなことになったみたいなので、ちょっと腹立たしい思いがしました。

先ほど言われましたように、熊野川の砂利採取が大きな問題になったときがありましたが、三重県側は、七里御浜と熊野川を守るために、砂利採取は早くから自粛しましたけれども、和歌山県側はいまだに河川に生コンの工場があります。自然流の中に人為的なものがあるということは、下流への影響がものすごく大きいわけです。それを早く止めて、自然の川に戻すためには、人間がつくった構造物は一切撤去する。地元民の熱意で、それをしなければならぬと思います。

七里御浜海岸が形成されてから、8,000 年から 1 万年と言われています。8,000 年から 1 万年たってやっとでき上がった自然の行いを、わずか 30 年間 - - 昭和 50 年ぐらいからですが - - で、井田海岸が消えたような惨めな姿の海岸にしてしまった。これは全部人間がしたことです。1 万年の自然の歴史の効果をたった 30 年で失うということに対して、自然を失った現在の大人は 30 年かかって早く償いをしなさいかぬ。

この 9 月 18 日に七里御浜シンポジウムというのを行いましたが、宇田先生は海岸侵食の第一人者ですが、おっしゃったことは、とにかく自然に逆らうな、自然の中へ構造物をつくったらいかぬと。九十九里浜は 50 年で完全に消えましたね。50 年前の姿を、宇田先生から送ってもらった写真で見ましたが、今はテトラポットの向こう側をわずかに日光線が走っているという哀れな状態です。

私たちは、19 年前、昭和 62 年から、熊野の自然を考える会を結成しました。シンポジウムのためにこういう本をつくりました。これに記録してあるんですが、1 年に 1 回春分の日熊野市で 1 ヶ所、御浜町で 1 ヶ所、紀宝町で 1 ヶ所、定点を設けて、汀線 - 波打ち際から堤防まで測っております。その記録を見ますと、ある年には急に海岸が侵食されたりして、これだけやせました。やせてどうなるかということ、ここへ記載しておいたんですが、井田海岸は人工海岸になって完全に消滅しました。この間も現地を見てきましたが、ウミガメ公園の下はもう消えてしまいました。ことし、2005 年の台風 7 号で、完全に消えました。その前は、1997 年の台風 9 号と 18 号でひどいパンチを受けて、国道まで波が来たわけですが、昨年まで豊かな海岸であったのが、急にやせたというふうなことで、マイナス面ばかり出てきます。

ことしは 19 回目の測量を試みましたが、12 回目井田海岸は 46 メートルマイナスであった。御浜は、国道にバス停のある向井口のポイントで大体マイナス 14.6 メートル、木ノ本海岸では、第 4 回でマイナス 27 メートル。そういうふうに極端に海岸が狭くなっている。

それだけじゃなくて、一旦こういうふうになると環境も大変です。 - 私 は毎年 5、6、7 と 3 ヶ月ウミガメの早朝パトロールを 15 年間続けておりますが - よく地域の人が小砂になったというのを聞くようになりました。小砂というのは、砂が底にあるんですが、表面には大きな礫がある、砂と礫が混じった層です。小砂の層はこんなに広い範囲にあるんです。ウミガメが卵を産むために掘る場所の 50 ~ 60 センチメートル下に川砂みたいな層があって、そこをウミガメが掘るんです。このぐらいの長方形の穴を掘って、そこへ卵を 100 個から 120 個産みます。40 分ぐらいかかります。その層が、表面の礫が全部流れたから、小砂の層がむき出しになっているわけです。むき出しになって、上の砂利層がなくなった。

ウミガメは卵を産む場所がなくなったので、一晩中はいずり、駆け回って、卵を産めずに、私が早朝 4 時ぐらいに獅子岩の近くに行ったら、卵を砂の上に転がしてありました。これは哀れです。一晩中卵を産む場所を、掘るのに 1 ヶ所で 40 分ぐらいかかるのを 20 ヶ所ぐらい掘って、太陽が昇ってくるとやっぱり慌てます。普通は後ろ足でかいて穴を埋めるんですが、上へ転がしてあるのを掘りますから、ミックス状態になって、全部割れています。半分だけようよう残っていたのを、横に穴を掘って戻してやったら、安心したのか、帰っていきました。午後 3 時に上陸して、夜明けの 4 時か 5 時にやっと帰

っていくのもあります。

七里御浜海岸なり熊野川の自然が急に変化をして、一番困るのは生き物です。人間が気づいたときにはもう遅い。

三重県の鳥のシロチドリは、大きな玉石があって、その間に卵を産みます。卵は斑点のある小石と同じ色ですから、トビとかカラスとか猫とか犬が見ても、卵というのとはわからぬわけです。ところが、小砂になると、卵を産んでも外敵に食べられますから、もう産みません。2、3年前までは、こどもを連れたシロチドリがチチッと歩いているところを見ましたが、昨年ぐらいからほとんど見なくなりました。

このように七里御浜海岸が随分変わっていきました。アカウミガメも、普通、海岸侵食のないときは、100頭から200頭ぐらい上陸して、半分ぐらい卵を産んだんですが、去年は、七里御浜で、上陸しても一つも産卵できませんでした。去年、上陸はわずか10頭です。ことしは、熊野市で6年ぶりに1頭産卵しましたが、このように生き物にとっては極めて情けない状態に、熊野川も七里御浜もなっているということは、自然というのはやっぱりなぶれば壊れる。高度成長で、人間の生活のためにすばらしく便利になったらいいという世の中は、もう終わったと思います。これからは自然を昔に戻して、後世の我々の子孫がよかったなど、一時は共生できないような状態の自然界をちゃんと戻してくれたんだということを言われるために、地域住民が一生懸命になって取り戻す工夫をしなければ、今そういうことで頭を痛めている人たちが一生懸命に取り組まないと、生まれてくる子孫は、そういう自然環境が豊かであった時のことを知らずに生きていくことになります。そういうことを最近つくづく感じます。

時間が長くなりましたが、具体的な例を申し上げて、終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

#### **瀧野委員**

どうもありがとうございました。4名の方々、本当に貴重なご意見、ありがとうございました。

議事進行ですけれども、今3時19分をちょっと過ぎています。3時半まで10分間ほど休憩をいただいて、その後、意見発表いただいた方と懇談会委員の意見交換という形で進めていきたいと思います。よろしくお願いします。

では、10分ほど休憩をいただきます。

( 休 憩 )

### 瀧野委員

それでは、時間になりましたので、後半の意見交換に移りたいと思います。よろしく  
お願いします。

意見発表をいただいたわけですが、懇談会委員の方々、意見とか質問とかあれば、  
お願いします。

### 吉野委員

きょう、いろいろご意見、情報をいただきまして、私の個人的感触としては、自然と  
人間との共生というのが主になるのかなという感じを受けたわけですが、具体的  
に高橋さんにお伺いしたいことがあります。

活性化に関する議論をされているということでございますけれども、私が現地を見さ  
せていただいた範囲内では、ここの文化の1つとして、材木流しという明治以来の技術  
があって、川原町ができる等の文化があるという感じがあったんですが、それが活性化  
の中でどう生かせるかという点と、どのように今検討されているのかということちょ  
っとお伺いしたいなど。

### 話題提供者(高橋氏)

いわゆる筏流しですが、道路ができて、トラック便になってから、すたれてき  
ています。それを復元するというのは、今のところ、私どもの部会では考えておりませ  
ん。あるいは、川には橋がございませんから、昔は渡しがありましたが、そういったこ  
とがあったということはみんなの認識の中に持ち続けていってほしいとは思いますが、  
筏流しというのは今のところ具体的には考えておりません。

### 吉野委員

今お返事をいただいたのですが、大は復元するか、小は単なる写真のパネルで紹介す  
るかという中間にいろいろあるだろうと思えます。例えば、展示館をつくるとか、語り  
部に説明させるような方法をとるとか、1かゼロかというのではなくて、その辺活性化  
事業で1つずつ対応していくべきだとの感触を少し持ったのです。

### 間瀬委員

花尻さんにお聞きしたいんですけども、ダム建設と砂利採取で、河口に出てくる砂  
が減って、最近海岸侵食が非常に大きな問題だと聞いていますが、去年急激にやせたと

いうお話があったと思いますけれども、私たちが見学に行きますと、人口リーフ工法で幾つかリーフが設置されていました。急にやせたというのは、その効果が余りなくて、要するに波で砂が流されたと思うんですが、リーフ自体は安定で、砂浜だけとられたという状況が去年は起こったんでしょうか。

### 話題提供者(花尻氏)

侵食が目に見えてひどいというのは、台風が東から八丈の方へ行った場合で、東からの波は、七里御浜がこうあると、こう削るわけです。南からののはそんなに削りません。大体真っすぐ東の方へ行きます。

台風の問題と、もう1つは、人工リーフの問題があります。場所によったら、人工リーフのおかげで昔に復したような感じのところもありますけれども、台風7号などというのは、東からの波がひどかったのも、それでかなり急激に削られた。もう1つは、極端に減った場合は、人工リーフから砂利が一たん流れて、七里御浜がこうなっていて、落ち込んでいますから、これの落ち込んだあたりに堆積しているだろうと。七里御浜の砂利の堆積の特徴は、波が直角にいきますから、絵でかくと、浜の傾斜がこうなっているんですが、汀線のところは、一たんこう上がるわけですね。というのは、直角に行きたいために、波がぱっと砂を上げるわけです。ですから、時には回復の傾向にあるところもあります。特に、大きな台風じゃなくて低気圧が来たときは、今言ったように、直角にさざ波とか波が来ますので、海底にあった砂利がかなり戻ってきています。

七里御浜も呼吸をしておって、大きな台風で砂利が削られたけれども、小波の場合はもう一回上へ上がってきます。その繰り返しをしておるみたいで、人工リーフの効果とありますが、御浜町は、堤防から汀線までの距離は、測定以前と同じになりました。

七里御浜全体は、浜やせによって、昔は有馬町でもアジを干したり、主婦が洗濯のシーツを持って行って干したりしたんですが、そういう人と海岸との生活関係というのが崩れている。そういうふうな現状です。

### 間瀬委員

もう1点、浜が削られるというのは、直角方向に削られるのと、沿岸方向に流れて削られるのがあるんですけれども、鵜殿港ができてから、北に流れる砂がなくなりますので、その北側にある井田海岸が侵食されるんです。熊野川から出てきたのは、鵜殿港でとまっているんですが、とまっているということは、今度は航路埋没という問題が起きているのかなという気がします。もし航路埋没が起きていましたら、そこを浚渫する必

要がありますよね。その浚渫した土砂を向う側に持ってくる。要するに、サンドバイパスといいますか、持ってきたものを来ない方にやる。そういうふうな対策はされているのでしょうか。

#### 話題提供者(花尻氏)

2つほど質問の中身があると思うんですが、1つは、鵜殿港が熊野川から流れてくる砂利で浅くなる。特に 2,000 トン級の船が紀州パルプのパルプ材を運んでいますから、2,000 トンになると、港に底がすれるわけです。大きなクレーン船で全部とって、そのとった砂は井田海岸へ運んでおります。

もう1つは、後におっしゃったサンドバイパスで送るかという問題は、七里御浜シンポジウムのおきにも出たんですが、国としてはそういう対策をとる場合に膨大な予算が必要だろうと。最も効果のある方法みたいです。鵜殿港の前にもう1つ、人工リーフの大きいのをつくりましたから、熊野川の河口を流れたのが、そのためにかえって和歌山県側の方へ流れてしまうということがあって、鵜殿港の沖にはかなりの量の砂利が堆積しているみたいです。干潮の時間になると、上から表面が見えますから、そういうのをサンドバイパスで送るといふ計画もあるみたいです。実現するかどうかはまだわかりません。

#### 江頭委員長

先ほど花尻さんのお話で、アカウミガメのお話があったんですが、通常水際というのは、表面が粗くて、礫をとると下が細かいというのが普通の材料の性質だと思うんです。表面の砂利がないために、産卵行動ができなかったというふうに伺ってよろしいんですか。

#### 話題提供者(花尻氏)

井田海岸の舞子から御浜町の境までは、小砂ばかりですよ。表面に礫がなくて、小砂ばかりです。卵を産めなくて、熊野市、御浜町で産卵できなかったカメは、産卵できる場所へ移動する努力をします。

#### 江頭委員長

表面が粗くないとだめなんですか。

#### 話題提供者(花尻氏)

それは海岸の状態によります。今のところ、熊野市と御浜町は、そういった海岸です。場所によっては、初めから小砂ばかりのところもあります。望ましい場所というのは、

昔は井田海岸にずっとあったんです。今は井田海岸は侵食で、産卵できる場所は減少しましたから、そこでできない場合は南部とか串本の方へみんな移動します。そこで産卵します。

去年とことしは、和歌山県の南部から串本は、アカウミガメの上陸と産卵がすごく多かったです。紀伊半島ウミガメ情報交換会というのがあって、いつも連絡しておりますので、こちらの分は全部向こうへ回ったというふうに思います。

### 江頭委員長

谷上さんと荘司さんは、川をよく観察していらっしゃるなと思いながら伺っていました。熊野川は、私の知る限りでは、明治 22 年に大災害が起こりまして、その影響が今もかなり受けているわけですね。明治 22 年ですと、本宮大社はそれまで水害に遭っていないですね。じゃあ、明治 22 年までに災害がなかったかといいますと、それまでにも随分あるわけです。あのときに川の姿が相当変わってしまって、その影響が長期間に及んでいるという印象なんです。

荘司さんはよく川をごらんになっているなと思いながら伺っておりました。山の整備が進むまでは、川というのは、22 年の影響でかなり土砂を排出してしまっていて、河床は上がる方向にありました。その後、山の整備が進むとか、ダムができる、また砂利採取 - - これが一番大きいと思うんですけども、全体的には山から出てくる砂よりも出ていく方が多いために、ずっと下がりつつある。そのために、治水上、洪水災害を防止するという意味では、扱いやすい川になりつつあると。もちろん、本宮町みたいに、全体の土砂流出は少ないけれども、川にある砂の再移動によって、たまるところは常にたまる方向にあります。そのため、上がった分はとらないと、すぐ洪水が氾濫して、災害が起こるといふ状況にあるんだと思います。

川の土砂のとり方ですね。そこら辺に工夫がいるんじゃないか。そういうことを思いながら話を伺ってしまっていて、まさに荘司さんが言われたように、伊勢湾台風当時は、河床が現在よりもかなり高くて洪水災害が起こったが、何年の洪水でしたか、河床が低かったために水につからなかった。この洪水は何年のことでしょうか。

### 話題提供者(荘司氏)

平成 2 年とか 7 年です。

### 江頭委員長

そういうお話がありまして、それこそよく川をごらんになっているなと思いながら伺

っていました。

それから、谷上さんは、砂利採取の影響とか土砂供給の減少が、川にどういうインパクトを与えているかという話でありまして、全体に川がやせていると。それで、伏流水がなくなったというのは、具体的にはどんなことでそういうふうにお感じになられたんでしょうか。感覚的にどういうことなんでしょうか。

### 話題提供者(谷上氏)

昔と現在を比較したときに、具体的な例を挙げてみますと、まず、砂利全体が少なくなったというのはありますけれども、水質汚濁が進むにつれて、当然のことながら、すべての砂利に泥が絡むわけです。今、ひざまでもいいですから、川の中へ入って、足で川原の石をじょじょとやってやれば、泥がうわっと浮き上がってくるわけです。昔はそういうことはなかったわけです。20センチ、30センチ掘っても、泥が出ないということで、砂利そのものがきれいだった。まずそれがありますね。

それと、川は、上流から下流へ当然流れてくるわけですが、その流れの中に、急流であったり、あるいはよどんでいるところであったり、わんこがあったり、あるいは岩にぶち当たったり、いろんな形状があるわけです。例えば、浅瀬になって、ずっと流れていて、少し下流に、例えば、わんこができています。そのわんこの中に、まさに伏流水と言われるような水がどンドン湧き出てくるわけです。石の中を流れてくる。大雨が降って、濁ったときなんかでも、わんこから流れてくる水は、同じ川の水なんですけれども、澄み切った水が流れてくる。昔は、そういう現象が随所に見られましたけれども、今はそういう現象はなかなか見られません。

それは、伏流水として水が流れてこなくなったというのが正解でしょうね。砂利だったら、砂利のすき間を水が流れるわけですが、砂利のすき間へ泥がたまっていますから、流れられないという現象があります。

そういう意味からすると、伏流水がたくさんあるということは、水位の調節なんかに寄与していた部分もあったのかなと、私なりに解釈しております。

### 江頭委員長

昔は、川原が広くて、水みちが1本ではなくて、何本も水みちができて流れているとか、今の水みちと昔の水みちというのは大分違う。川底が高かったために、川原が発達していた。今は水みちが1本で流れるような川ですけれども、水みちが幾筋も流れているような状況ではなかったのでしょうか。

**話題提供者(谷上氏)**

昔と今を比較しまして、そうですね。一般的には、川は上流から水が流れ出しますと、伏流水で下流に向かうもの、本流、川そのもので、川の中を流れていく水、もう1つは蒸発をしていく水と、3つに分かれるわけですが、伏流水の形で流れる水というのは、極端に減っていますね。感覚的に見ましてもそうですけれども、先ほども申しましたような、わんこの中から水がわき出てくるという現象は、全くと言っていいほどなくなると言えると思います。お答えになっているかどうか……。

**江頭委員長**

ありがとうございます。今なぜそういうことを伺ったかといいますと、砂利採取の問題、要するに下流へ土砂が行きにくくなっていると。そういう問題をいかに緩和できるような川づくりができるかということを考えながら伺ってしまして、今私がちゃんとお答えを申し上げることはできませんけれども、参考にさせていただきたいと思っています。

**話題提供者(谷上氏)**

もう1点申し上げたいのは、砂利が下流に向かって流れにくくなっているというご発言でしたけれども、地域によれば、できるだけ砂利が下流へ流れないようにという施策がないものかなと。あるいは、下流に流れていった砂利をもう一度上流へ戻せないかなという議論も、世論として実際あるんです。

例えば、道路がありまして、その下が山であり、竹やぶであり、その次が川原であり、そして水の流れている川であった。そういう状況が、道路があって、その下が山で、そこからいきなり川になってしまっているというところもたくさんあるわけです。川原がやせているというような状況ですね。護岸がどんどん削られていくという現象が、先ほど井田海岸、七里御浜の例もありましたけれども、川の中にもそういうところはたくさんあります。昔と今は随分変わったということです。お答えになっているかどうかはあれですけれども。

**話題提供者(荘司氏)**

今の江頭先生のご質問に私の方から一言お返事させていただきたいと思います。

下流へ土砂がいったいない状況というのは、私のところの地区では、川原にヤナギとかアシが生えてきまして、洪水が出て削られることがありません。ということは、そこで石が動いていない状況だと思います。

今の時期、谷川の水が伏流水になって出ているところとか、水が土の中を通ってきて噴き出しているところというのは、死ぬ直前のアユがたくさん集まってくるんです。地中を通った水は温かいので。谷上さんが言われた伏流水というのは、そういうところへ出てきているんだけど、今はそういう場所が限られてきているということだと思います。

それと、花尻先生が先ほどから何千年前、何年前ということでお話しされていますが、熊野川の河床の高さがかつてどれだけであったかということは、もう一度皆さんに考えていただきたいと思います。河床にバラスが堆積しているということは、かつてそれよりも河床が低かったということです。

津藩の最初の藩主藤堂高虎が紀和町で城を築いています。赤木城と言うんですけど、そこへ高虎がなぜ来たかといいますと、木材奉行として、紀伊半島、熊野川流域の木を大坂に送るために来ているわけです。そのように昔から乱伐が行われてきた。そして、江戸期の炭の需要のかなりの部分は熊野川流域で賄われていた。

そういうことから考えると、かつてから木材伐採というのは頻繁に行われて、伐採されたところには必ず崩壊が起きたらうと。そういう土砂が川に流れ込み、そして道路工事が始まるようになると、農道にしても、林道にしても、初めは全部谷川に切った土を捨てるという工法でなされてきたわけですから、それが河床の上昇につながったんだらうと思います。だから、さっき高橋さんも言われましたけれども、もとに戻すということであれば、どの高さが正しいのか、そのあたりも一度ご検討いただきたいと思います。

#### **江頭委員長**

貴重な意見、ありがとうございます。

#### **吉野委員**

谷上さんの説明の最後の方に、最近地域で森を育てる動きがあらわれつつあるというのがありまして、この地域にはそういう動きは大事だという感じが少ししたわけです。その動きはどの程度のもので、どういう人たちがそういうことを今やろうとしているのか、少しご説明いただきたいと思います。

#### **話題提供者(谷上氏)**

隣におられる荘司さんが、むしろ緑の専門家、山の専門家ですから、私で足りない分は、あと、補足をしていただきたいと思います。

私、山を育てる、森を育てるということは、川を育てるということに通じると言うんです。これは直結しているのかなと。これは皆さんも同じ考えだろうと思います。そういう意味で、自然を守る、山を育てるということは大切なことだろうと思いますし、その考え方は、昔から、特に田舎の人は持っていたと思います。時代の移り変わりとともに、それが変化してきた。それは事実だろうと思いますね。

あと、そういう取り組みと申しますか、機運の盛り上がりとはどんなだろうかというご質問だと思いますけれども、私のお答えできる範囲でお答えさせていただきますと、全国規模で緑を育てようという機運は、国の制度として盛んに今始まっているのかなと。自慢話になってしまうんですけども、国土緑化機構という国の機関がありまして、そこでの森の名手・名人ということで、私、ことし認定されました。それで、あちこちお話を伺ったりしているわけですけども、これはまさに森を育てようということで、自然を守るすべてに通じる考え方だろうと思います。

森の名手・名人というのは、森林、あるいは木材に関連した仕事をしている人、あるいは木という素材でいろんな加工をしている人、あるいはそれに関連して地域の伝統文化を守っている人、そういう人を毎年全国で 100 人選んで認定をするという制度なんです。あと、聞き書き甲子園ということで、全国の高等学校から高校生を 100 人選んで、それぞれの名手・名人のところへ行って、仕事の内容とか、考え方とか、いろんなことを勉強して、全国発表するという取り組みもやっております。私のところへも、三重県の久居農林の橋爪君という方が、中西先生という教頭先生と県の職員と一緒に来られて、私のところへ一晩泊まっていただいて、いろいろお話をしたわけです。

そういう機運も、国がしっかりバックアップをしながら盛り上げていこうとしています。そういったところから、私は最初に、大変いいことだというふうに発表させていただいたわけです。その辺が私の考えているところであります。

先ほど言いましたように、荘司さんは専門の方ですから、具体的にいいご回答を得られるかもわかりませんので、ちょっとマイクを回します。

#### 話題提供者(荘司氏)

本宮町の方で、企業の森という取り組みが今始まっています。そして、新宮市の方で、社団法人新中会で、サクラの山 - - ヤマザクラですけども - - 植えられています。紀宝町にも、18 町歩ほど、サクラの山ということで、NPO 法人が立ち上がりまして、サクラを植栽しております。

ただ、熊野川流域で、自然環境に一番配慮した林業をされているのは、ここの委員をされている浦木さんのところですよ。昭和 48 年から非皆伐長伐施業ということで、山の木は皆伐しない、200 年たった木でも、間伐をして、間に植栽をしていく、多段林にしていくということで、林業をされております。林野庁の方でも、最近になってようやく非皆伐長伐施業というのが補助対象となって取り入れられてきているところです。浦木さんは大変広大な森林面積をお持ちなんですけれども、そういう一貫した趣旨で経営されていて、そういう面では一番先進的な経営をされていると感じています。

### 中島委員

荘司さんにちょっとお聞きしたいんですけども、私、和歌山県では護摩壇山と高野山の隣のブナの原生林と本宮にある果無山のブナの原生林 - - しか知らないんですけども、昨年、ちょうど 1 年前、ブナの木のためのコンサートというのが、本宮武住間の林道で、新宮から車で 2 時間、そこからさらに 2 時間山に登った、そういう環境で開かれました。確かにブナの木というのは、落葉すればすごく保水力があって、私、ブルーシートをかけていただいて、その上に座ったんですけども、沈んでいくほどで、じゅうたんのようないい気持ちで、コンサートを聞かせていただいたんです。

先月、三重県の実業家の方が、ブナの木をヒノキとスギの間に混植すれば、相乗効果になって、小動物がかえってきたと言われて、大変明るいニュースだと思って感心したんですけども、これからはもう人工林に頼る時代じゃなくて、ブナなんかも入れて、水をきれいにして、還元していただくというのでもいい方法じゃないかと思うんですけども、いかがでしょうか。

### 話題提供者(荘司氏)

三重県では、環境創造事業という事業が行われています。林道から 400 メートル以上離れたところの森林については、人工林、広葉樹林も含めて、公的資金で山林を管理していこうという方法なんです。例えば、スギとかヒノキの林を 50% ぐらい間伐して、その中に広葉樹を導入し、その次皆伐したときには広葉樹林に持っていこうと、そういう取り組みがなされています。

私は、浦木さんのところで 20 年ほどお世話になりました、その間森林の一番理想的な形というのは、上に針葉樹、この地域でしたら、モミ、ツガ、トガ、サワラ、スギ、ヒノキ、マツ等ですが、それから高木の広葉樹、下に中木の広葉樹があって、低木があって、地衣類があると、そういう林が一番好ましいのかなと考えています。

非皆伐長伐施業というのは、間伐を繰り返すことによって、中に広葉樹が入ってきます。今は植栽をしましても、シカの害がありますので、1本1,000円近い金をかけないと木が育つことはありませんので、広葉樹の植栽というのも大変難しい問題だと思います。自然に生えてくるように林相を持っていく方が好ましいのかと思いますけれども。

### 椎葉委員

川を利用していく上では、必ずしもすべての人がうまくいく、みんなが満足する方向にいくとは限らないと思うんですけれども、熊野川においても、川の古道ということで、観光船を復活していくということが、例えば、先ほど言われました、航路維持のために掘って、それがほかの観点ではよくないというようなことがあるんだろうと思います。そういうことが、高橋さんの観点ではどうなのか、荘司さんから見たらどうか、こういう点から見るとこれはよくないということがないかと思うんです。

例えば、先ほどの航路の維持のために掘るということが、花尻さんにちょっとお話しいただいたんですが、そういうところは、どんなふうを考えて、どういうふうに折り合いをつけていったらいいとお考えなのか、ちょっとお聞きしたいと思います。

### 瀧野委員

そうしたら、舟を運航する上で、谷上さんや荘司さんの方から先に……。

### 話題提供者(荘司氏)

お客さんを乗せて川を走ってしまして、一番困るのが、川底が浅いことなんです。プロペラが河床に当たるとはね上がりまして、自由がとれなくなって、大変危険な状態になります。そういうことから、航路の維持というのはどうしても必要なんですけれども、熊野川では、上流の方では、川作ということが言われます。川の石を拾って、横に積んで、水を1ヶ所に集中させて船を通す方法です。最近バックホーとかを使って機械で川底を掘っていますけれども、自分たちが今年の春やったのは、水に入って、石を横に集めて、船が通るだけ維持しました。

ことは水害が1度しかありませんでしたので、それですと来れたんですけれども、水害がないということは雨も降らないということで、水が大変減ってきてまして、最終的にはバックホーで掘ってもらって、航路を確保しています。ただ、1ヶ所、水の中心となると掘らなければいけないのに、そちらへいくと川岸の岩ばかりの危険なところへ近づきますので、川原の真ん中を掘りました。当時はよかったんですけれども、川の流れは自然と元の水の流れのところに戻りまして、そこが自然と河床が下がるんです

ね。深さも維持できて、さわらなくても十分通れる状態に今なっています。

これからは、人工的にやるのも大事なんですが、そういう自然の力を利用しながら、そこに水を集中させる方法で、石を並べるなり、簡単な制御をするなり、そういうことで対処できれば一番いいかなと。私は、それが理想だと思っています。

観光で大型船を通す場合と、自分らみたいに小船で川を選びながら通る場合と、少し差があると思います。

#### 話題提供者(谷上氏)

基本的には荘司さんと全く同じなんですけれども、川を浚渫するという言葉がよく使われると思いますけれども、浚渫というと、強制的に掘ってしまうというイメージが強いと思うんです。荘司さんがさっき言われていましたけれども、川さくと言いますが、川をつくるということは、技術的にも本当に難しいんです。素人が来て、掘り放しても、雨が降り、ちょっと増水すると、壊れてしまったり、また違うところへ川ができたりということがあります。兩岸のどこに出っ張りがあって、川がどう曲がっているんやろうかとか、本流がどこやろうかというようなことを十分把握しながら、川づくりというのはしないと、すぐに壊れてしまう。そういう背景があります。

これも昔との比較になるんですけれども、例えば 50 年前だったら、川を掘らないと船が通らないというところはまずなかったですね。例えば、台風の後、大きな石が流れてきて、そういうのが邪魔になるということはあったとしても、全体が浅くなって船が通らないという現象は、昔はちょっと考えられなかった。

その背景には何があるんだろうか、その原因は何だろうかという、先ほどの議論に戻るんですけれども、熊野川全体の水量がどうなったのかと。紀の川筋とか、尾鷲付近とか、分水しているのも 1 つの要因なのかなと。下流ではその辺も考えられます。質問のお答えになったのかどうかちょっとわかりませんが。

#### 話題提供者(高橋氏)

先ほどから申し上げていますように、私どもは、自然を維持したい。自然のままというのを保持したい。来ていただくお客さんには、川魚がとれる場所も確保していきたい。もちろん、川下りも体感していただくんですが、私どもが今考えておりますのは、川下りだけじゃなしに、先ほどから申しますように、周辺でのいろんな楽しみをしていただく。通常の大船、大きな川船でどっと下るだけというのは、今のところ私どもは考えていないんです。何遍も言いますように、周辺のいろんなこともまとめて体感していた

だくというふうにやっております。そういう意味では、荘司さんが言われましたように、今のところは小さな船を使ってやろうかなと考えています。

こっちを立てればあっちが立たずというのは確かにございます。子どもが地域活性化のためにそういうことをやることで、ほかの面から見たら影響があると思いますので、その辺はいろんな話し合いといいますが、共働的なことも考慮していかなあかんとは考えております。

### 話題提供者(花尻氏)

私、さっきウォータージェット観光船が通航できないというふうに申し上げましたけれども、先ほどから谷上さんや荘司さんがおっしゃったように、自然には自然の流れがあるので、そこを通るといことは、昔の人はそれを守ったと思うんです。江戸時代に船で下って、また船を上げるのは大変だったそうです。川原を歩くのと川の中に入って歩くのと両方あるわけですが、記録を見ると、船を上げるのに、口笛を吹くように、ひいひい、ひいひい言いながら、船を引っ張っていたと。

望ましい姿は、やはり川の中央とか、岸寄りとか、いろんなところの流れを見ながら自然に従うというのが一番大事ですが、さっき荘司さんがおっしゃったように、地域によっては、道路からすぐ川原になって、昔里山があった場所の野原がなくなって、すぐそこが川原になっている。そういうところについては、長い将来計画を立てて、方法を考えないと、急いでそこを構築したりすると、また七里御浜のような現象が起きる。そういう場合は、七里御浜のことも、川のことも、古老が一番よく知っています。行政なり学者さんは、設計図をかく前に、地域の古老に、昔はどうであったか、昔の生活と川の生活はどうであったかということをして、それを参考意見にしながら、その方法を考えるというのが一番大事だと思います。それをやってこずに、急いで設計図をかいたために、今日のような現象が起こるんだと思います。

古老というのは、だんだん亡くなりますから、特に 100 歳近い古老で、昔のことをよく知っている人がいる間に、地域の人を通じて意見をくみ上げる。そういうことがほかの方法でもあるので、地域に入り込んで、地域の人々の知恵を知るといった方法が大事かなと思っております。

### 瀧野委員

ほかにはございませんでしょうか - -。

それでは、少し時間が押しています。このあたりで意見交換を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

きょうは、多くの方が傍聴に来られています。できましたら、発表者以外の傍聴者の方からもご意見を伺いたいと思います。皆さん遠慮なさって、後ろの方に座られていますので、できれば、傍聴者の方でご意見をいただける方は前の方に出てきていただいて、お話をいただければと思います。

最初にも申しましたけれども、ご意見をいただく前に、お名前をおっしゃってから、よろしくお願いします。

#### 一般傍聴者(山口氏)

紀宝町の山口と申します。谷上さんと荘司さんのご意見の補足のよう形になるんですが、新宮高等学校の瀧野先生がおいでになるんですけれども、新宮高等学校と同窓会の歩みをちょっと申し上げて、権威ある先生方のご判断、今後の計画について、少しでも参考にさせていただければ大変ありがたいと思っております。

先ほど荘司さんが新中会ということをおっしゃいましたが、新宮高等学校の同窓会の新中会では、熊野川をどう守って、どうしていったらいいかということで、荘司さんのお父さんに 50 年間ずっと山を管理して指導していただきまして、4 年ほど前に国道沿いにサクラ 3,000 本を植え終わりました。それから、三重県側が、NPO 桜の会、田尾会長を中心とする会が、熊野川のちょっと横に入りますが、2 万本のサクラを植える計画を立てまして、今 4,000 本近く植え終わっております。

熊野川は、世界遺産になりましたから、多くの日本の方に来ていただきたいという願いを込めまして、私は、新宮、本宮間を新宮桜街道と銘打って、吉野に負けないような 2 万本のサクラの並木道、それから対岸もサクラを植えて、谷上さんがおっしゃった川下りですね。先日、最上川とかいろいろ私行ってきたんですが、熊野川の川下りは日本一だと思います。幸い区長さんの谷上さんが一生懸命やってくれておりますので、兩岸にサクラの花が満開になって、そして川下りをすれば、いろいろな日本の人々が来て頂けるのではないかと思います。

先日、和歌山県の教育関係者に、「何でこれが世界遺産なのか」と言われ、川で下ってみると、兩岸がコンクリートばかりで、これが世界遺産と言えるだろうかと思いましたが。谷上さんからちょっとお話が出ましたが、そういった面も先生方にお考えいただきたいと思っております。

もう一つは、世界遺産で、紀の国の熊野川ですから、新中会では、5 年ほど前になり

ますけれども、6,000本の60年生のスギ、ヒノキを切らずに、熊野の森として残す記念碑を立てまして、屋久杉と同じように、何千年も保存する計画で、荘司さんのお父さんが - - 新中会の会長なんです - - 、一生懸命骨を折ってくれております。

私は、いろんな人に来てもらう、熊野川の水流を見てもらう、熊野の山や木を見たら人の心が癒されると。春は桜、秋はもみじと、熊野川の支流の高田に300本ぐらいかえでの木を植えて、そういったとっかかりをつける。そうして、沿川には道の駅をつかって、そこに熊野川とかウミガメの話も出ましたけれども、すべての資料があるという図書館的な道の駅をつかってみたらどうかと。そうしたら、川下りをして、桜を見、そして先ほど熊野川の魚の話が出ましたけれども、勝浦へ行けば、温泉と熊野川のアユと、新鮮なマグロ、鰹が食べられる。夜には毎日徳島の阿波踊りのようにマツケンサンバでもやっている。そういうふうになれば、日本じゅうの人が来てくれるんじゃないかと。瀧野先生がおられる新宮高等学校と同窓会が中心で、夢を持っております。市民の皆様や先生方、計画の中にぜひともよろしくお願いを申し上げます。

#### **瀧野委員**

ありがとうございました。このことについては、先生方、いかがでしょう。

#### **江頭委員**

私、森づくりとか、そういうものについては素人なんです、話を伺って、不安になる点が1つあります。熊野川固有の森林を育てるというよりも、人工的にそういうものを持ってくる。このようなことはいいのかなと。そういう不安を抱きながら伺っていたんですけれども、いろいろな専門家の先生方がいらっしゃいますので、それはご意見を伺いながら……。

#### **一般傍聴者(山口氏)**

今のところ、新宮高等学校の和歌山県側サクラ3,000本と三重県側にNPO熊野桜の会4,000本、その程度です。それから、熊野の森と言いましたのは、新宮高等学校が学校林としてずっと育ててきた木なんです。それ以上のことは、することは私は難しいと思っておりますけれども、日本の人が熊野へ来て、体感をして、山を見て、川を見てというふうにするには、あと、どんなことをすればいいか、先生方の貴重なご意見をよろしくお願ひ申し上げたいと思います。

#### **一般傍聴者(大西氏)**

紀宝町の大西といいます。

熊野の各地で古道ガイドをおこなっていますが、熊野川の川下りガイドも行っています。今回のお話がこれから 2、30 年の間に熊野川地域をどうやっていくかということが大きな目的らしいんですけども、現在南檜杖の所で川の方へ道が張出しているし、上流域の十津川でも同じ部分がある。

日足のあたりで改修の計画があるようですが、会議の目的がこのような事を続ける中で、少しでも良くしようと考えておられるのか、あるいはこういうことじゃいかぬな、もうちょっと他の事を考えないかぬな、と言う事でやっておられるのかがはっきりわからないので…。

どちらでもいいんですけども、私は、もうちょっと他の方を考えるためにやっておられると勝手に解釈をしてお話をさせていただきます。

熊野川の状況によく似ている、川下りとか川とかを利用した観光地というのは、京都の保津川があると思うんですね。長さは 16 キロで、熊野川の川下りの 16 キロと全く一緒なんです。あそこは、かつての福知山線をトロッコ列車にして観光客を運び、新本線はトンネルではあっと抜いているんですね。

それを考えたら、今の国道 168 号線は観光道路にして、南檜杖は仕方ないけれども、あそこからもう少し上流で、くねくね曲がった道を真っすぐにするのなら、物流の道路として、トンネルで抜くとかしたら、もっといいんじゃないか。京都の 100 万と新宮の 2 万、3 万の都市では道の需要が違うけれども、そういう事を考えてもらえたらいいなと思います。

今ガイドをしているという話をしましたが、川下りのスタート直後に蛇和田という所があります。地名的には蛇というのは崩れやすい所と話をすると、もう少し下流に来て、崩れたようになっている所で、ここも崩れ易いのか、と質問を受ける事がある。ここは道路工事だろうという所がある。

最近の工事ではないだろうが、道路工事のやり方というのをもっと考えてほしいし、できれば、新道はトンネル化して、今の道路は観光道路的にしてもらえたらありがたいなと思います。要望です。

#### **瀧野委員**

ありがとうございます。予定の 4 時半になってきましたが、もう少し時間を延長しても構わないということです。もし傍聴者の方でご意見がございましたら、よろしくお願

いします。

#### **国土交通省紀南河川国道事務所井澤専門調査員**

失礼しまして、国土交通省の方からちょっとお知らせしたいことがございます。国土交通省紀南河川国道事務所の井澤と申します。皆さんのお手元に熊野川ネットと書かれた 1 枚もののペーパーを配らせていただいています。このご紹介をさせていただきます。

今国土交通省の方で構想しているものなのですが、そちらへ書かれているように、熊野川にかかわる流域の人々、行政、産業、すべての人々をつないで、交流、連携を深め、熊野川に対する思いや知恵を集めて、魅力ある流域をつくっていくためのネットワークということで、要するに、熊野川にかかわっている方々、関心のある方々をつないで、それぞれの情報を共有していく。そういうネットワークができればいいなということを考えていまして、広い流域の中に、和歌山、奈良、三重 3 県、多くの市町村がある中で、流域全体で 1 つのつながりがないんじゃないか、そういうのをもっとできればいいなという思いで考えております。

さしあたっては、ホームページなどを立ち上げまして、そこにいろんな人が入って、情報を共有できればいいなということを考えております。まだまだアイデアの段階で、進行中なのですが、失礼して紹介させていただきました。どうもありがとうございます。

#### **瀧野委員**

少し間が入ってしまいましたけれども、傍聴者の方で、こういう機会はなかなかないと思いますので、ほかにご意見をいただきたいと思います。

#### **一般傍聴者(松山氏)**

私は、熊野川の上流の北山川、七色ダムがあるところの熊野市神川町の松山と申します。

地域と市とのパイプ役のような仕事をさせていただいておりまして、きょうの熊野川を語る会、熊野川懇談会という情報を、きのう、中日新聞の小さい記事で見まして、前から非常に関心があったものですから、傍聴に来させていただいた次第でございます。

仕事の傍ら、熊野川のアユ釣りに、下手なんですけれども、興味を持っておりまして、毎年アユ釣りをしておりますが、熊野川は、アユ釣りの方々にとりましては立派な川だということで、京都や大阪、名古屋から、毎年釣り師が見えておられるということは、皆さんもご存じかと思えます。

話が飛躍しますけれども、熊野川の河口が、鵜殿と新宮の間もつながって、歩ける状態にあるんです。私、きのうも、新宮の王子ヶ浜の方からと鵜殿港の方から写真を撮ってきました。毎年ぐらい撮らせていただいているんですけれども、海に通じているところが、全体の川幅の 10 分の 1 以下かなと思うわけなんです、そんなようなことは、ダムをつくったための因果関係があるのか、あるいは鵜殿港というのは人工的につくられたというふうに伺っているわけなんです、そんな因果関係があるのか、先ほど花尻先生は古老の方に意見を聞くのが一番よくわかるとおっしゃっていましたので、新宮か鵜殿の古老の方に一遍お話を伺いたいなと思っているわけなんです。

それはともかくといたしまして、結局、ああいう状態では、恐らく天然アユの遡上、あるいは天然ウナギの遡上というのは難しいのではないかといつも感じておりました、何とか因果関係を究明しながら、原因者負担というんでしょうか、責任というんでしょうか、そんなようなものも、これからの課題として、まあ政治的な問題になろうかと思いますが、考えていっていただきたいなと。地域住民の一人として、きょうはせっかくの機会ですので、申し上げさせていただきたい。

もう一つ、七里御浜の海岸侵食で、人工リーフをされまして、それなりの効果があったやに思うわけですが、最近、三重県が数億の工事費を投じてやられたと思うんですが、市木川の河口に、そのとき沈められた 1 トン、2 トンの巨岩が浜に顔を出しているような状況だと思うんです。私、現場に行って確認していないので、はっきりは言い切れませんけれども。

そういうことを考えると、数億の工費を投じてやったことが活かされているのかどうか、国交省なり、あるいは県土木さんは、追跡調査をして、今後の糧にさせていただきたい。効果があるのであれば、工事を進めていただきたいし、ないのであれば、もっと有効な経費の使い方があるんじゃないかと感じておりました、せっかくの機会でしたので、取りとめもない私の意見ですけれども、申し上げさせていただきました。

ご発表の皆さんから、これまでの体験等踏まえてのお話をいただきまして、まさに共感できる部分ばかりでございます。きょうは参加させていただきまして、本当に有意義だったということをおし添えまして、私の発言にかえさせていただきます。ありがとうございました。

#### 瀧野委員

貴重なご意見、本当にありがとうございます。

### 一般傍聴者(ノボリダテ氏)

紀宝町のノボリダテと申します。私からご提案申し上げるということはないんですけども、きょうの発表者の方々、また委員の方々の意見を伺えればと思います。

熊野川は、行政的には、三重県、和歌山県、中部地域という境にあります。先ほど来、熊野川の河床の問題、あるいはバラスの問題、高さがどうなのか、ひいては七里御浜に大きく貢献するバラスだろうと思うんですが、流れの変化によって、今の侵食にも大きくかかわっているだろうと思います。そういうことからして、特に三重県と和歌山県が、バラスの採取については、同じ行政であっても、全く見解を異にしているわけです。三重県は採取させない、和歌山県は採取させると。川のいろんな会議の中でも、その辺がしばしば問題になります。ダムにしても功罪両面あると思いますが、そういうようなものが影響して、バラスの自然流下というものが阻害されていることも事実なんです。

しからは、理想的な川を維持するために、バラスは採取した方がいいのか、そのまま残すのがいいのか、もし手を加えなきゃいけないとした場合に、どういうことを眼目にして取り組むべきなのか。熊野川については、この問題が一番大きくかかわってきていると思います。

発表された方々には、日々川を眺めてこられた中での経験的な意見を伺えればと思うし、土木の専門家の方々には、行政のそうした違いの中にあっても、熊野川というのはどうするのがいいのか、お教え願えればと思いますので、よろしくお願いします。

### 江頭委員長

川づくりの本質にかかわるようなお話でありまして、今私がここで、私の考えはこうだというふうに申し上げるわけにはいきにくい面がありますので、ご容赦いただきたいと思います。ただ、水とか砂というのは、やはり連続性がないといけないというのは、皆さん共通の考えではないかと思います。連続性といいますのは、砂というのは、上流から来たものが下流へ流れる。さらに、洪水時にはたくさん流れ、低水的时候には流れない。それが自然の摂理じゃないかと思うんです。そういうことを通しているんな川の形ができていきまして、そこにいろんな生物がはぐくまれていって、結果として、1つの河川生態系、森も含めての話であります。そういうふうなものができてきていると私どもは考えております。自然の擾乱が大き過ぎますと、これは災害になりますから、許容できる範囲で擾乱をコントロールしながら、そういう川づくりができれば最高ではないかと、そういうふうに思っております。

ただ、これは、熊野川に対してどういう川づくりをなさいたいということではなくて、私の全く個人的な考えとして聞いていただきたいと思います。

#### 話題提供者(谷上氏)

私も、全く個人的な見解で、一言だけお話しさせていただきたいと思います。

行政の和歌山県と三重県の違い、こういったものは、私どもの地域では、和歌山県とか三重県という意識は全くございません。熊野川は1つだという見解ですので、行政の方も、何とか1つになって、いろんな施策を講じていただきたいというのが私の考えです。また、そのことは、両県に対しても私個人的にいろいろ申し上げてきたつもりでございます。

もう1点、バラスを取っ払えばいいのか、あるいはふやせばいいのかということなんですけれども、自然に戻すという観点からしますと、取っ払うと言うのはいい方法ではないと思います。部分的には大変弊害になっている箇所もあると思いますが、それは部分的に処置をすればよいことで、バラスが少なくなった弊害の方がはるかに大きいと思うからです。熊野川を考えると、ダム下流域のバラス量が激減しているこの事実を施策の参考にして戴ければ有り難いと思います。

#### 話題提供者(荘司氏)

今谷上さんが言われた、家の裏に砂利層があるというお話は、これは隆起した堆積土であると私は思います。ノボリザキさんもよくご存じかと思いますが、かつて紀宝町は、浅里で砂利採取を行いました。そうして、左岸の昔の堤防があらわれましたけれども、それに対し、目立った災害とか被害とかはありませんでした。そして、浅里地区の<sup>しも</sup>下に、かつて試掘したコンクリートのパイル、大変大きな塔がありました。それが四、五メートル川原から上に露出しまして、先年それが撤去されました。かつて僕が子供のころは、そのコンクリートの構造物は川原の上に出ていなかった。それだけ河床は下がっています。そのために、浅里地区において、水害の危険性というのは大幅に減少しました。

そのようなことから、災害が発生する可能性のある場所については、砂利採取は行うべきであると私は思います。

#### 瀧野委員

ありがとうございました。ほかに傍聴者の方、ご意見ございませんか - -。

それでは、時間も大分延長しまして、5時近くになってきました。たくさんの方から貴重なご意見をありがとうございました。お伺いしました意見は、今後の懇談会の審議

の参考とさせていただきます。ありがとうございました。

これで本日の熊野川を語る会を終了させていただきます。本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございました。今後の審議の上で、非常に貴重な意見を伺えたと思います。審議の中で取り扱わせていただきますので、よろしくお願ひします。

これをもちまして、語る会を終わりたいと思います。

最後に、庶務にマイクを回しますので、諸連絡をお願いします。

### **庶務（中條）**

長時間ありがとうございました。外も大分暗くなってきていますので、気をつけてお帰りにいただければと思います。きょうは、お忙しい中、どうもありがとうございました。

（拍手）